令和３年度埋蔵文化財発掘調査

# 野中廃寺現地説明会資料

記者発表　　令和３年　７月　９日（金）午前 11 時～12 時
現地説明会　令和３年　７月１１日（日）午前 11 時～12 時

南国市教育委員会

## １．調査に至る経緯と経過

野中廃寺は江戸時代の歴史書「南路志」に既に鐘楼堂跡として載っており、基壇が残る古代寺院として知られていましたが、創建年代や伽藍配置など詳しい内容はほとんど分からず、謎の古代寺院とされてきました。昭和 38 年には、JR 線路の北と南にあった基壇の一部を発掘調査し、大量の古代の布目瓦が出土することが確認されていましたが、伽藍配置など寺の内容について語る材料はほとんどありませんでした。

今回、分譲宅地建設工事に先立って、野中廃寺の内容を確認する試掘確認調査及び本調査を実施したところ、伽藍配置が判明するなどの大きな成果が挙がりました。

## ２．発掘調査の概要

所　在　地　　南国市元町１丁目
調査目的　　分譲住宅地開発工事に伴う発掘調査
調査主体　　南国市教育委員会
調査期間　　令和２年２月１７日～令和２年８月１２日（試掘）
　　令和３年５月　６日～令和３年７月末（本調査予定）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ★ | 野中廃寺 | 4 | 忠兵衛遺跡 | 8 | 年越山1～3号墳 |
| 1 | 若宮ノ東遺跡 | 5 | 小篭遺跡 | 9 | 祈年遺跡 |
| 2 | 北泉遺跡 | 6 | 越戸1・2号墳 | 10 | 東崎遺跡 |
| 3 | 北野寄遺跡 | 7 | 坂折山1・2号墳 | | |

**図１　周辺の主な遺跡**

３．調査成果

## ◎新たに２つの基壇が見つかりました。

古代寺院における基壇は寺の中心的建物である伽藍を構成する重要な遺構です。従来の建物は地面に穴を掘り、柱を立てる掘立柱の建物でしたが、大陸から伝わってきた寺院建築は重量のある瓦葺き建物を置くために地盤改良（掘込み地業）を行って基壇をつくり、礎石の上に柱を置くのが特徴です。

これまで、基壇１と基壇２の存在だけが知られていましたが、令和２年の試掘調査により、他に２つの基壇があることが分かりました。新たに見つかった基壇は上部が削平されていますが、基壇の下を版築という技法で突き固めた掘り込み地業が残されており、おおよその基壇の規模を知ることができます。

これら４つの基壇の特徴から、基壇１が中門、基壇２が金堂、基壇３が講堂、基壇４が塔と判断できます。

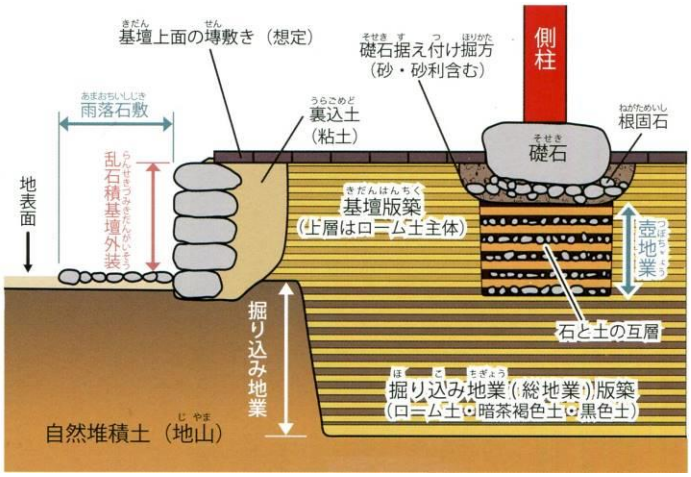


図２ 基壇模式図（史跡武蔵国分寺跡パンフレットより転載）

野中廃寺の金堂基壇は、県内で現存する最古の寺院基壇です。周囲が水田だったこともあり、削られて当時より規模が小さくなっていますが、もともとは東西２５．５m以上、南北１８m以上の規模であったことが確認できました。東辺には石敷が伴っていたことが分かり、基壇周囲の雨落ちなどの施設と考えられます。また、基壇を構築している版築の土層が良好に残っていました。

図３ 金堂基壇と石敷遺構

図４ 金堂基壇版築土層

塔基壇は１辺約１２ｍの大きさです。上部が削平されて礎石などは残っていませんが、瓦がまとまって出土した範囲の位置関係で柱の配置が推測できます。

講堂基壇は創建当初の規模が東西２９.４ｍ、南北１７.７ｍで、後に東側に５.５ｍ拡張していたようです。

図７　塔基壇と礎石痕跡

これらの基壇の周囲からは破損した瓦を廃棄するための土坑が多数掘られており、非常に多量の瓦が出土しました。

図８　講堂基壇版築土層

図９　瓦溜り

## ◎県内で初めて古代寺院の伽藍配置がほぼ判明しました

寺院を形成する主要な建物のことを伽藍といいます。伽藍には本尊仏を安置する金堂、舎利を安置する塔、僧の講説の場である講堂、中門、僧房、鐘楼、経楼などがあります。野中廃寺では、中門、金堂、塔、講堂の４つの基壇を確認し、その位置関係から法起寺式に近い伽藍配置であることが判明しました。

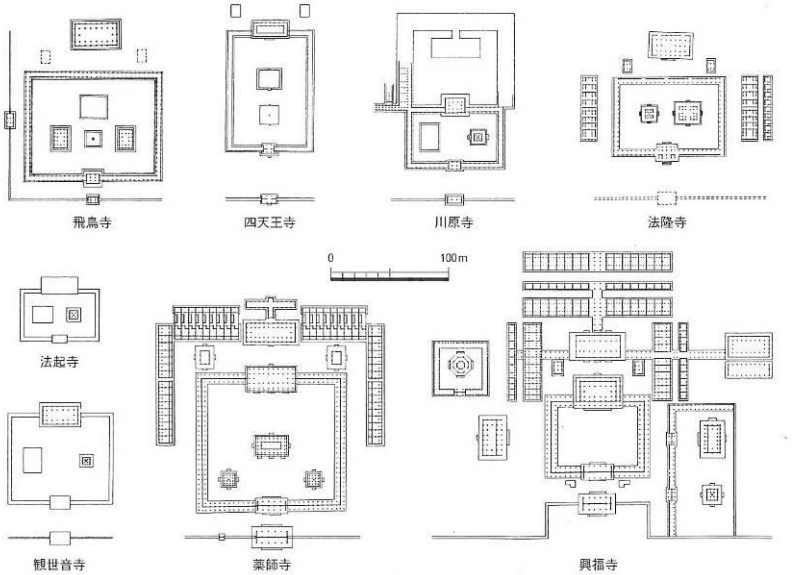


図 10　古代寺院の伽藍配置図（『発掘調査の手引き』より転載）

## ◎大型の掘立柱建物跡を確認しました。

今回の調査で新たに南北棟の桁行９間、梁行３間の大型掘立柱建物跡を確認しました。柱間距離は桁行２.２ｍ、梁行２.１ｍ等間で規格性の高い建物です。建物規模は桁行１９.８ｍ、梁行６.３ｍ、面積は約１２４.７㎡にもなります。内部には桁行３間ごとに束柱と考えられる一回り小さい柱穴があり、内部に仕切りがあったようです。建物の方位は伽藍の軸に合わせて建てられており、伽藍の一部を構成する建物と考えられます。

また、柱痕から硯に転用された須恵器の蓋が出土しました。

建物構造や遺物から、僧房の可能性が高いと思われます。

図 11 大型掘立柱建物跡

## ◎出土遺物から、寺院の存続時期や瓦などが判明しました

これまでの調査では、多量の瓦は出土していたものの、土器はほとんどなく、創建年代等を推定する手がかりがほとんどありませんでした。今回の調査で軒瓦や多くの土器等が出土したことで、寺院の様相や時期等を推定する手がかりを得ることができました。

図 12 二彩陶器

これまで、野中廃寺は平安時代前期の寺院と位置付けられてきましたが、出土した土器は８世紀代のものが最も多く、存続時期は７世紀後半～１０世紀頃までと考えられます。

今回の調査で出土した特筆すべき遺物は、二彩陶器や鉄鉢型須恵器、転用硯、青銅製品などがあります。二彩陶器が県内で出土が確認された例は野中廃寺を入れても３遺跡しかないもので、内面に釉が施されてないことから大型のものと推測でき、壺や瓶ではないかと考えられます。鉄鉢型須恵器は、僧侶の修行や食事などに使う鉄製の鉢（鉄鉢）を模した須恵器で、主に寺院関係の遺跡で多く出土します。須恵器の中には、文字のようなものが刻まれたものや、硯の代わりに使われた転用硯なども出土しています。

また、出土した軒平瓦の文様は県内のみならず県外の古代寺院をみても類例が見つかっていないもので、更なる調査・研究により野中廃寺の系譜や存続時期の特定に繋がる可能性があります。

図 13 刻書須恵器

図 14 講堂出土軒平瓦

## ◎まとめ

今回の調査で新たに２つの基壇を発見し、法起寺式の伽藍配置であることが判明したことは画期的な成果と言えます。現在県内で確認できている古代寺院は８ヶ所しかなく、その中でも伽藍の基壇が残されている例は土佐国分寺跡と野中廃寺の２例だけとなります。加えて伽藍配置がほぼ判明したのは野中廃寺のみであることから、県内の古代寺院を研究する上で非常に貴重な遺跡となります。

また、僧房跡と思われる建物も確認できたことから、寺域内の施設配置についてその一端を確認することができました。

そして、野中廃寺から南西に約 500m の位置には、若宮ノ東遺跡があり、近年の発掘調査で古代の官衙に関する建物跡が見つかっています。7 世紀後半という同じ時期に出現した寺と官衙の２つの施設には深いつながりがあることが想定できます

図 15 野中廃寺から若宮ノ東遺跡を望む

図 16 作業風景

## ◎おわりに

今回の調査では、古代寺院の寺域の大半を対象に調査したことによって非常に大きな成果を得ることができました。

調査にあたっては、開発事業者および地権者の方をはじめ、多くの方々に多大なるご支援・ご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

今後とも文化財調査へのご理解・ご協力をお願いいたします。